

第六話

銀蔵ぎんぞうキツネと

おばあさん



お寺のおばあさんが、出かけていった先で、孫にトウギミ（とうもろこし）を土産に用意して、そいつを首に結わえて帰り道を歩いていたんだと。

おばあさんのことだから、足も遅くてや、家に着く前に月が出たんだと。

「やれ、遅くなった。急いで行くべ」

おばあさんは、持ってた提灯ちようちんに明かりを入れて、足を速めたが、なにしろ年寄りだ、そうは早く歩けねえのさ。

そのうちに、ますます暗くなって、道が見えなくなったんだと。

「いや、年取って、目もわるくなったかや」

そんなことを独り言して歩いていたら、ガザガザと音がして、顔見知りの青木銀蔵さんあおき ぎんぞうという人が出てきたんだと。銀蔵さんはおばあさんを見て、聞いたんだと。

「おばんつあん。どこさ行くのや」

「今、お寺さ帰るどこだ」

「ああ、なんだ、んで、おれ、その荷物持ってけっから。一緒にお寺さ行くべ。おばんつあんどこ送っていくから」

「いいから、軽いから、おれ、持っていく」

おばあさんが言っても、銀蔵さんは、

「いいから、いいから。持ってくれっから」

って、むりむり取り上げて、トウギミ包んだ風呂敷を持ってくれたんだと。

そして、ずっと行ったら、銀蔵さんの姿が見えなくなったんだと。あたりはますます暗くなったから、提灯をその桑の木くわに掛けて、桑の枝を折って手に持って、おばあさんはね、

「ほう。ほう。おれの道がねえ。おれの道がねえ」

って、騒いでいたんだと。

そのとき、寺の和尚さんが、萩はぎの浜はまってあるんだけど、その檀家だんかの家さ行って、寺さ帰ってくるどこだったんだと。

「どうも、家のばばの声するな」

って、行ってみたら、おばあさんが桑の枝持って、ほうほうと騒いでいた。

「なにやってんだ」

って、おばあさんどこつかまえて、尻をぱんつと叩いたら、目え覚めたようになったんだと。

和尚さんが般若心経はんしんぎょうを唱えたら、そばの柴の中から、しゅーつと逃げたものがあつたんだと。

そいつがキツネだったんだね。トウギミはみんな取られて、なにもなくなっていたんだと。

トウギミはキツネのご馳走だから、銀蔵さんに化けて盗りにきたんだね。